

重松裕巳編

名所句集

古典文庫

重松裕巳編

名所句集

古典文庫

古典文庫第四七六冊

昭和六十一年六月二十日印刷発行

非売品

集 句 所 名

編 者 重 松 裕 巳

発 行 者 吉 田 幸 一

印 刷 者 白 橋 印 刷 所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古 典 文 庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

凡例	三
解説	五
名所句集	八
△静嘉堂文庫本▽	
春(第一)	一九
夏連歌(第二)	五八
秋連歌(第三)	七五
冬連歌(第四)	一二三
旅連歌(第五)	一三一
恋連歌 上(第六)	一五五

恋連歌 下(第七)	一六
雜連歌 上(第八)	一八〇
雜連歌 下(第九)	二八
発句(第十)	二五
初句索引	二九
正誤表	三五

凡例

本書は静嘉堂文庫本〔三七一八 五三一八〕「名所句集一」を底本とする。
翻刻にあたってはなるべく原本に忠実であるように努めたが
概ね次の方針をとった。

イ、原本の異体字宛字は現行の活字に改めた。

ロ、原本の片仮名はすべて平仮名に改めた。

ハ、原本の明らかな誤字脱字等には手を加えず右傍に（ママ）とした。

検索の便を考慮し通し番号を施した。

巻末に全ての句の初句索引を付した。

本書の翻刻をお許し下さった静嘉堂文庫に深く謝意を表します。

重松裕巳

解説

本書は、宗砌 専順 心敬 賢盛 智蘊 能阿 行助 宗祇 兼載 肖柏 宗長 宗碩の、いわゆる七賢時代から室町中期を代表する作家十二人の、名所を詠み込んだ句を撰び、編んだ句集である。上中下の三冊から成り、序文も跋文もなく、付句千二百三十七句を春・夏・秋（上）冬・旅・恋上・恋下（中）雑上・雑下（下）の九つの部に収め、最後に発句二百二十六句を付載する。この十の部立は、二十の部類を採る菟玖波集や新撰菟玖波集によらず、宗祇の「老葉」や「下草」宗長の「壁草」等の個人の句集の体裁に倣ったものと思われるが、排列は時の推移に従うという正統な方法をとっている。「名所」は、

けふはむかしのかたみとはなる

朝霞袖ふる山に春はきて

宗 祇

のように、付句に一箇所詠み込む句を原則とするけれども、

霞をよする田子のうら波

清見瀉関ともいはす年越て

兼載

のように、前句付句ともに詠み込んだ句も多く、又

一むらの里はたく火にあらはれて

波のうへなるあまのいゑしよ

宗碩

のように、前句の「里」と付句の「あま」とで「里の海人」（阿波国）を詠む例や、又

はてもはかなき旅のはてく

甲斐かねもみえぬ筑波の山風に

肖柏

のように、付句に二箇所の名所を詠む例もある。

次に十二人の作家の所収句数を、各部立ごとにわかり易く表に示すと以下のようになる。

											作家名 / 部立
能	行	賢	宗	心	肖	宗	専	兼	宗	宗	
阿	助	盛	碩	敬	柏	砌	順	載	祇	長	
2	8	13	9	8	7	17	20	38	41	43	春
0	5	5	6	5	3	8	13	14	15	16	夏
5	8	5	7	15	7	15	24	35	38	36	秋
1	4	7	1	4	4	8	7	12	23	25	冬
4	3	1	4	12	8	8	13	16	21	33	旅
2	0	1	6	1	2	5	3	13	13	20	恋上
0	1	1	5	1	1	0	6	10	16	20	恋下
3	6	7	11	9	14	22	22	38	24	45	雑上
7	1	6	8	8	6	21	19	17	34	50	雑下
3	2	1	3	4	42	1	4	14	80	71	発句
三 七	三 六	三 五	三 四	三 三	三 二	二 五	二 三	二 七	三 五	三 六	総 計

	智 蘊
211	5
91	1
201	6
98	2
126	3
67	1
62	1
203	2
178	1
226	1
一四三	三

もっとも多いのは宗長の三五九句で、以下宗祇 兼載 専順 肖柏 心敬 宗賢盛 行助 能阿 智蘊の順となっている。これを七賢と宗祇グループ（兼載 肖柏 宗長 宗碩）とに分けてみると、

	全 句 数	付 句 数	発 句 数
七賢	四八句 (〇・三〇%)	四三句 (〇・三三%)	一六句 (〇・〇七%)
宗祇グループ	二二五句 (〇・七〇%)	八五句 (〇・六六%)	二〇句 (〇・九三%)

のように、両者には相当の隔りがあるとみてよい。この事は、名所句集の編者が

編者に近い作家を重視した結果とも、あるいは名所句は七賢時代よりも連歌完成期に好んで詠まれたとも考えられるが、編纂時の資料の寡多もかなり関係しているのではないかと思われる。ただ発句にみるように、例えば入集句数では一三一句で第四位の専順でさえ、発句は僅か四句しかなく、七賢の総数で十六句に対して宗祇 宗長 肖柏らの発句数は付句の比率以上の入集率をみせているのは、発句に名所を詠む連歌完成期の一つの特色と言えるのではないかと思う。

次に各作家の所収句を、他の現存資料によって確かめ、それを各作家ごとに、
 総数 出典名 未詳数句などを表示しておく。

作家名	総句数	出典名	未詳句数
宗長	三三九句 付句 二八八 発句 七一	壁草一一六 那智籠六五 老耳五三 連歌付様四 宗長手記八 発句集四 出陣千句四 伊庭千句一 独吟千句一 伊勢千句一 宗長日記一	二〇二句

宗 碩	肖 柏	宗 砌	專 順	兼 載	心 敬	宗 祇
六句 付句 発句 三七	九四句 付句 発句 四二五二	一〇五句 付句 発句 一〇四一	一三句 付句 発句 一二七四	二〇七句 付句 発句 一九三一四	六七句 付句 発句 六三 四	三〇五句 付句 発句 一二三五 八〇
発句聞書一	水無瀬三吟一	四 宗砌句集三四 竹林抄一八 宝徳千句	四 專順句集五八 竹林抄三五 宝徳千句	園塵一二〇	竹林抄一二 心敬句集一二 芝草四 苔蘚二 付句四 吾妻辺云捨三 享徳 千句四 河越千句五 何路百韻一 何人百韻一	老葉八五 萱草六七 下草六二 宇良葉一一 河越千句三 新撰祈念 百韻一 発句集二四
五句	九三句	四句	三四句	八七句	一九句	五二句

賢盛	四七句 付句 発句 四六 一	竹林抄三八 宝徳千句三	六句
行助	三六句 付句 発句 三六 二	竹林抄一五 行助句集一一	三句
能阿	二七句 付句 発句 二四 三	竹林抄一五 能阿句集五	七句
智蘊	二三句 付句 発句 二三 一	竹林抄一五 智蘊句集一	七句

入集句の多い宗長と宗祇は、自撰句集や百句千句等数多く現存し、連歌師の中では資料の整った作家であるにもかかわらず、それらにも見い出せない句があるということは、編者が現存資料以外に相当広汎に亘る作品群から常に用意していたことを意味するものであろう。その他の作家についても出典未詳の句をもつ「名所句集」に一つの意義を認めるゆえんである。

卷末の識語に「いかなる人のえらひものせしにやきゝも侍らす大永の前後に撰

み置るものならんかし」とあるように、編者と成立については今のところ未詳とする他ないが、推測の手懸りがないわけではない。それは発句部の、

伊予国の人駿河国に尋下り所望に

一四〇 見すやあらぬいく船道のふしの雪

の句で、この句は「宗長日記」に次の記述で載っている。

△享祿三年（一五三〇）▽十一月七日、ふと山臥府中にて尋つれど、こゝもとのよし聞てとて尋来。いづくの人と、へば、伊予国にて、まことに真実に見え侍る。

とはずとも八十余りは君ぞ見むいよの湯桁の数しらぬかな

万葉に、一伊与の湯のゆげたはいくつ数しらずかぞへずよまず君ぞしるらん」。又、翌日来り、発句所望に、

みずやあらぬいく船みちの富士の雪 （岩波文庫）

十二人の作家の中でもっとも没年が遅いのは、宗碩の天文二年（一五三三）四月廿日であるから、宗碩の作品が名所句集の編年次に一番近いことになるが、先の表

に示したごとく宗碩の作品で詠句年次が明らかな一句は、永正十七年（一五〇）正月六日詠なのでここでは問題でない。次は天文元年（一五三）三月六日没の宗長で、宗長の作品の中でもっとも新しい句が右の「一四四〇」の句である。そこで現段階では享禄三年十一月十八日を名所句集成成立の上限とすることができよう。

次に、享禄三年以前に没している宗祇 兼載 肖柏の三人は対象から外し、宗長の周辺に少し検討を加えてみよう。

先に引用した名所句集一四四〇の発句の「詞書」と「宗長日記」とを比較してみた場合、名所句集の「詞書」は「宗長日記」の写しでも要約でもない。おそらく句集か手控え類の詞書であろう。つまり「宗長日記」は名所句集の資料ではなかったのだらうと思うのである。

このような例を「宗長手記」に拾ってみよう。

句番号	名所句集詞書	宗長手記
一四三	江州守山の人早天に来てついで所望	ある人來つゝで発句所望に

一四三	相坂の関より所望に	逢坂の関屋よりとぶらひくだる人、上下につ たへて発句所望。是ぞよき過書と悦入て
一四三	東山泰昭富士一見帰京春は又の 契にかの最勝寺にしてなと白川 の歌のよせ春は待侍らんの心な るへし	泰昭此二・三年富士一見。又筑波のあたりま で下向。この六月に駿府に帰り、此まゝ越年 などのあらまし。俄に東山治部卿法橋泰賢よ りむかひ下ぬ。すでに四・五日中上洛、小原 兵庫頭嵩親二・三年知音。賤別の興行。発句 さがたくて、（三句略）東山はしら河最勝 寺にして、雅経卿 なれゝてみしは名残の 春ぞともなどしら河の花の下かげ この鞠の かゝりの桜なるべし。泰賢・泰昭の父泰謀、 予四十余年の知音、他にことに付て駿河国尋 下、いま上洛。春はやがて下向あるべきのち ぎり付としらかはの心にや。

長い引用も、名所句集と宗長手記との相違を示すためであるが、性格を異にする両書が、原資料（書き留め）の扱いに違いがあるのは当然のことであって、こ